

歴史・文化サイトカード

通しNo.		1-B-3		更新日		2025/1/31	
サイト名		地元産石垣と国宝天守～松江城					
基本情報	区分	☒ 有形 ☐ 無形 ☐ その他					
	所在地	松江市殿町一番地続六					
	指定別	「松江城天守」国指定					
	種別	①重要文化財 ②国宝					
	指定／登録年月日	①1935(昭和10)年5月13日 ②2015(平成27)年7月8日					
	管理団体／モニタリング	松江市					
	周辺施設／アクセス	☒ トイレ ☒ 売店 ☒ 飲食店 ☒ 駐車場(台)					
	留意点	松江城天守、附祈祷札2枚、鎮宅祈祷札4枚、鎮物3点が国指定文化財、国宝に指定					
サイトの解説	歴史・文化	松江城は、松江市街の中心部、亀田山に築かれた平山城である。1600(慶長5)年に出雲・隠岐の領主となった堀尾氏が、1607(慶長12)年より築城を開始し、1611(慶長16)年にほぼ完成した。現在の天守はこの時につくられたものである。 外観は四重、内部五階、地下一階の形式で、正面の南面には玄関となる附櫓を設け、屋根はすべて本瓦葺である。軸部は長さ二階分の通し柱を多用しており、周囲に包板を釘や鋸(かすがい)、帯鉄で取り付けた柱も多数見られる。部材の番付は二種類に大別され、二階以下に用いられた分銅紋に「富」の字を刻む部材は、安来市にあった富田城の部材と思われる。 松江城天守は、中国地方に唯一残る荘重雄大な四重五階の天守である。最近になって再発見された二枚の祈祷札から、1611(慶長16)年の完成が明らかとなった。 通し柱による構法などの独自の建築的特徴を有し、近世城郭最盛期を代表する建築として極めて高い価値がある。防御性を重視した中世山城から、高層化して近世都市の基軸へと進展してきた我が国の城郭文化の様態を示しており、深い文化史的意義がある。					
	地形・地質、生物・生態等	松江城天守閣が建造されている亀田山の北には、かつて尾根続きの宇賀山(うがやま;今はない)や赤山(松江北高校所在地)があり、さらに北には真山・白鹿山へと続く丘陵地をなしていた。堀尾吉晴・忠氏親子が松江城を築いた時に宇賀山を開削し、堀としたため亀田山は孤立した山容となった。天守内に井戸が設けられている城は国内では珍しい。およそ23mの深さがある。亀田山をつくる松江層の特性として、開削や掘削しやすい軟質の砂岩であったことが指摘される。 また、石垣には大海崎石(和久羅山ダイサイト)、矢田石(松江層玄武岩)、森山石(古浦層凝灰質砂岩)、忌部石(大森層安山岩)など地元の石材が主に使われている。石垣の築造・修繕時期によって積み方や使われる石材が異なる。隣接する松江歴史館には、天守台の石垣の薄片試料や天守閣基礎部より出土した玉石(長径21cm、短径16.7cm;閃緑岩～ハンレイ岩)が収蔵されている。玉石は、大芦産とされてきたが、最近の調査では三坂山の同質の貫入岩に由来する風化核のようである。 城の建つ亀田山の西側は、ふけ田(法吉坡からの湿田)や南側は穴道湖、東側は朝酌川が注ぎ込む「松江湖」とよばれる入り江になっていた。そのため北側の宇賀山(うがやま)を開削し堀へと地形改変することで亀田山に建つ松江城の城郭としての機能が高まった。亀田山と北側の丘陵地が約1100万年前の軟質砂岩(松江層)であったことが開削を容易にした。また、この山の砂岩層中には炭層が挟まれており、これを利用した火力発電所があった(1895(明治28)年)。松江城二の丸には「電気発祥之地」の石碑がある。					
写真・図等							
参考文献							